

大嘗祭について

令和元年10月2日
宮内庁

1 意義

大嘗祭は、稲作農業を中心とした我が国の社会に古くから伝承されてきた収穫儀礼に根ざしたものであり、天皇が即位の後、初めて、大嘗宮において、新穀を皇祖（天照大神）及び天神地祇（すべての神々）にお供えになって、みずからもお召し上がりになり、皇祖及び天神地祇に対し、安寧と五穀豊穰などを感謝されるとともに、国家・国民のために安寧と五穀豊穰などを祈念される儀式である。

それは、皇位の継承があったときは、必ず挙行すべきものとされ、皇室の長い伝統を受け継いだ、皇位継承に伴う一世に一度の重要な儀式である。

2 沿革

大嘗祭の沿革をたどると、その起源は、新嘗の祭に由来する。新嘗の祭については、我が国最古の歴史書である古事記（712年に撰進）や日本書紀（720年に撰進）において、皇祖天照大神が新嘗の祭を行われたことや上古の天皇が新嘗の祭を行われたことの記述が見られるように、その起源は、それらの歴史書が編纂された奈良時代以前にまで遡ることができる。

なお、新嘗の祭が、我が国の社会に古くから伝承されたものであることは、常陸国風土記（8世紀前半に完成）に引く説話や万葉集（8世紀半ば過ぎに編纂）の歌によっても明らかである。

7世紀中頃までは、一代に一度行われる大嘗祭と毎年行われる新嘗祭との区別はなかったが、第40代天武天皇の時（御在位673～686年）に、初めて、大嘗祭と新嘗祭とが区別された。爾来、大嘗祭は一世に一度行われる極めて重要な皇位継承儀式とされ、歴代天皇は、即位後必ずそれを行われることが皇室の伝統となった。

なお、歴代天皇のうち大嘗祭を行われなかった例があるが、それは、大嘗祭

を行われる前に退位されたり，或いは相次ぐ兵乱などのために経費の調達が困難であったことにより，大嘗祭を挙行することができなかったというような特殊事情があったからである。このほか，歴代天皇の中には，挙行を確認できない若干の例もある。

3 儀式の挙行

大嘗祭は，上述のように皇位が世襲であることに伴う一世に一度の極めて重要な伝統的皇位継承儀式であるので，今回も，皇室の行事として，皇室の伝統に従い，先例等を参酌して行われる。

(1) 時期

大嘗祭の中心的儀式である大嘗宮の儀は，「悠紀殿供饌ゆきでんきょうせんの儀」と「主基殿供饌すきでんきょうせんの儀」である。今回，悠紀殿供饌の儀は令和元年11月14日の夕方から夜にかけて行われ，主基殿供饌の儀はその翌日の11月15日の暁前に行われる。

なお，これに引き続き，「大饗だいきょうの儀」が11月16日及び18日に行われる。

(2) 場所

大嘗祭は，約1,200年前，平安京に都が定められて以来京都で行われ，東京に都が遷された明治以降も，明治度を除いて京都で行われてきたが，平成度は，東京の皇居東御苑で行われ，今回も同所で行われる。（平安京に遷都される前は，当時都が置かれていたところにおいて大嘗祭が行われていた。）

(3) 大嘗宮だいじょうきゅう

皇居東御苑には，大嘗祭を行うための大嘗宮が特別に設営される。

大嘗宮の起源は，必ずしも明らかではないが，既に奈良時代の大嘗宮の遺構が平城宮跡から見つかっており，その後，平安時代以降今日まで，『貞観儀式』（9世紀後半に成立した儀式書）等に沿った大嘗宮が，大嘗祭の都度設営されている。

今回設営される大嘗宮は，先例に従い，およそ90メートル四方の敷地に，悠紀殿（悠紀殿供饌の儀を行うための建物），主基殿（主基殿供饌の儀を行うための建物），廻立殿かいらゆうでん（大嘗宮の儀に先立ち天皇及び皇后が御潔斎やお召替えをなさる建物）の殿舎を中心に，それに関連する建物や参列者幄舎な

ど大小30余の建物が設営され、その総面積は、約2,700平方メートル余の予定である。これらの建物は、床は筵又は畳表を敷き、扉及び壁は畳表を張り、柱は加工をしない皮つきの丸太を用いるなど、伝統的に質素なものとされている。

(大嘗宮平面図面別添)

(4) 参列者

大嘗宮の儀は、夕方から翌日の暁前にかけて簡素厳粛に行われるものであるため、その参列者は700名程度とし、外国代表の参列は予定されていない。

(5) 次第

大嘗祭の中心的儀式である大嘗宮の儀の次第は、『貞観儀式』や明治42年(1909年)に定められた『登極令』などに記述されているが、それらを通じて基本的に異なるところはない。今回も平成度と同様、この長い伝統に従って儀式が行われる。その儀の次第は、おおむね次のとおりである。

○ 悠紀殿供饌の儀

- ・参列者が参進して幄舎あくしゃに着床する。
- ・稲舂歌いなつきを歌い、稲舂いなつきを行い(新穀を精白する)、神饌しんせんを調理する。
- ・庭積にわづみの机代物つくえしろもの(各都道府県の特産である農林水産物)を置く。
- ・掌典長が祝詞を奏する。
- ・天皇陛下が本殿にお進みになり、御座にお着きになる。
- ・皇后陛下ちやうでんが帳殿ちやうでんにお進みになり、御座にお着きになる。
- ・くすくすいにしえぶりいにしえぶりの古風くすいにしえぶり(古代、大和の国栖人が奏した歌謡)を奏する。
- ・風俗歌ふぞくうたを奏する。
- ・皇后陛下が御拝礼になる。
- ・皇族殿下が拝礼される。
- ・参列者が拝礼する。
- ・皇后陛下が御退出になる。
- ・神饌しんせんを行立ぎょうりゅうする。(神饌などを行列を立てて本殿に持ち運ぶ。)
- ・天皇陛下が神饌しんせんを御親供ごしんくになる。
(天皇陛下が、新穀をもって調製した御食みけ・御酒みきなどを皇祖及び天神地祇にお供えになる。)
- ・天皇陛下が御拝礼の上、御告文おつげふみをお奏しになる。

(天皇陛下が、皇祖及び天神地祇に対し、安寧と五穀豊穰などを感謝されるとともに、国家・国民のために安寧と五穀豊穰などを祈念する御告文を奏される。)

・御直会^{おんなおらい}

(天皇陛下が、新穀をもって調製した御食・御酒をお召し上がりになる。)

- ・神饌を撤下する。
- ・天皇陛下が御退出になる。
- ・参列者が退出する。

○ 主基殿供饌の儀

悠紀殿供饌の儀と同様である。

以上の儀式の次第から、冒頭の1において述べたように、

「大嘗祭は、稲作農業を中心とした我が国の社会に古くから伝承されてきた収穫儀礼に根ざしたものであり、天皇が即位の後、初めて、大嘗宮において、新穀を皇祖及び天神地祇にお供えになって、みずからもお召し上がりになり、皇祖及び天神地祇に対し、安寧と五穀豊穰などを感謝されるとともに、国家・国民のために安寧と五穀豊穰などを祈念される儀式である。」という大嘗祭の意義がうかがえる。

(6) 新穀等

大嘗宮の儀においては、あらかじめ卜定した悠紀、主基の両地方の齋田^{さいでん}(大嘗祭に用いられる新穀を耕作する田)で収穫された新穀が、それぞれ悠紀殿供饌の儀、主基殿供饌の儀における神饌御親供や御直会に用いられるのが古来の伝統である。

今回は、悠紀の地方としては東日本から栃木県、主基の地方としては西日本から京都府が卜定されており、悠紀の地方の齋田で収穫される新穀が悠紀殿供饌の儀に、主基の地方の齋田で収穫される新穀が主基殿供饌の儀にそれぞれ供進される。

また、大嘗祭には、各種農産物の豊作を感謝するため、庭積の机代物という名称で、各都道府県の特産である農林水産物も供進される。

4 大饗の儀

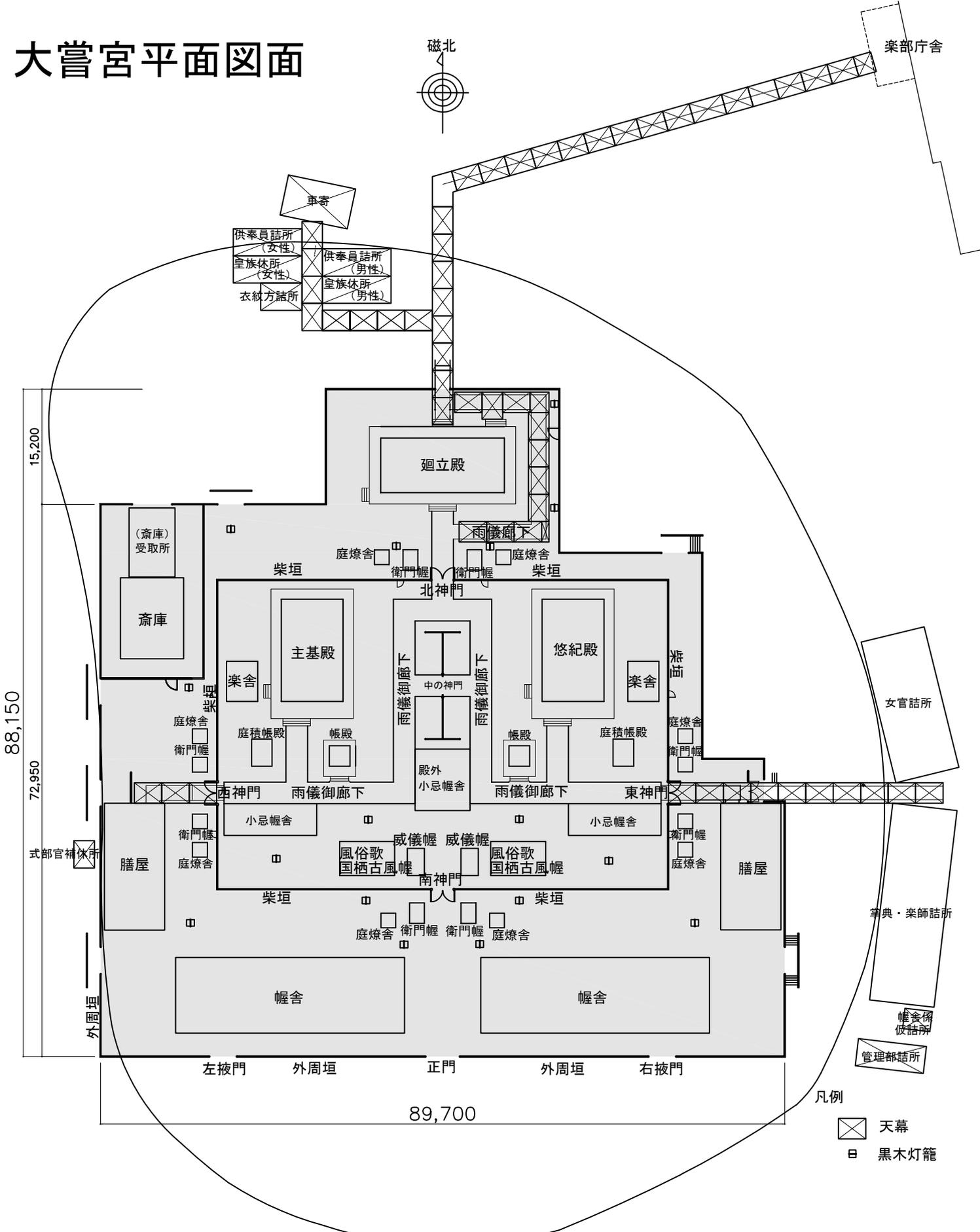
大嘗宮の儀終了後、天皇陛下が大嘗祭の参列者に齋田から産する新穀をもって調製した酒と料理を賜り、共に召し上がって安寧と豊作を祝う節会（宮中において催される饗宴）として大饗の儀が宮殿において行われる。

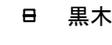
大饗の儀は、大嘗祭の参列者を2回に分けて、11月16日及び18日の両日にわたり宮殿内の豊明殿で行われる。その儀の次第は、おおむね次のとおりである。

- ・天皇皇后両陛下がお出ましになる。
- ・天皇陛下のお言葉がある。
- ・代表者が奉答する。
- ・白酒・黒酒を賜る。
- ・式部官長が悠紀・主基両地方の献物（両地方の特産である農林水産物）の色目（品目）を申し上げる。
- ・天皇皇后両陛下に御膳・御酒を供し、参列者にも賜る。
- ・久米舞（古代、久米部の行った歌舞）を奏する。
- ・悠紀・主基両地方の風俗舞を奏する。
- ・大歌（五節舞の際に奏される宮廷伝来の古代歌謡）及び五節舞（舞姫によって奏される宮廷伝来の舞）を奏する。
- ・挿華（冠に挿す花飾り）を賜る。
- ・天皇皇后両陛下が御退出になる。

また、この大饗の儀の式場には、伝統に従って、各種農林水産物の豊作を祝うため、悠紀・主基両地方の献物として両地方の代表的な農林水産物が陳列されるほか、風俗歌屏風（悠紀・主基両地方の四季の風景を描き、これに応じた和歌を書いた色紙を貼付した屏風）が立てられる。

大嘗宮平面図面



- 凡例
-  天幕
 -  黒木灯籠